

[抄録様式]

公益財団法人 8020 推進財団 平成 28 年度 歯科保健活動助成交付事業報告書抄録	
1.	事業名：唾液及び歯肉溝液を用いた若者の歯肉炎罹患の評価に関する集団検診事業
2.	申請者名：公益社団法人 香川県歯科医師会 会長 豊嶋 健治
3.	実施組織：公益社団法人 香川県歯科医師会 国立大学法人 徳島大学大学院医歯薬学研究部予防歯学分野
4.	事業の概要： 学校歯科健診等における集団歯科検診の現状は、歯科医師による触診と視診に頼った検査であり、診査者の技量や主観に依存する比重が大きく、客観的な診断基準がない。唾液や歯肉溝液に含まれる炎症性バイオマーカーの生化学的機器測定は歯肉の炎症との関連が報告されており、歯肉の炎症状態を客観的に評価することが可能である点で主観に頼る検査データに対する長所を有し、より高い信頼感を持って人々に受け入れられると考えられる。そこで従来の専門的技法と主観に頼る検査に依存しない炎症性バイオマーカー検査を集団検診に試行的に導入して、歯肉の炎症状態を客観的に評価することにより、歯科健診事業の効果が向上できるかどうかを検討することを目的として、集団検診事業を 3 年間にわたり実施した。
5.	事業の内容： 本年度は香川県大手前高松高等学校の 1, 2 年生（男子 217 名、女子 129 名、合計 346 名）を対象として検診事業を実施した。上顎と下顎の左右小臼歯間 16 歯の唇側歯頸部から歯肉溝液検体を採取した。次いで 3 ml の蒸留水を 10 秒間洗口し容器に吐出させて、唾液検体を採取した。歯肉溝液と唾液検体の採取にあたっては、飲食や口腔清掃などの影響を排除するよう配慮をした。炎症性バイオマーカー検査について、唾液中の遊離ヘモグロビンと乳酸脱水素酵素、歯肉溝液中の α -1 アンチトリプシンとラクトフェリンを測定した。また、歯ブラシとデンタルフロスの実施頻度について質問調査を行った。検体の採取は高校の協力の下、香川県歯科医師会会員と協力歯科衛生士が行い、データの分析は徳島大学予防歯学分野が行った。
6.	実施後の評価（今後の課題）： 炎症性バイオマーカー検査によって得られる数値データは、歯肉の健康状態の問題を、現行の検診方法に比べてより簡便かつ客観的に判定する指標として期待される。学校歯科健診では、受診者個人の口腔の健康課題を元に歯科健康教育を行うための教材を見つけることも重要である。検査の結果を呈示するのみならず、口腔疾患の予防のために必要な習慣の形成や、かかりつけ歯科医院への定期的な受診行動のきっかけ作りとなる、適切な教材を提供するものであることが望まれる。現在の歯科検診は、診査者の技量や主観に依存する比重が大きく、客観性が担保されていない。また、病的変化の発見への比重が大きく、診査結果が健康教育の教材として活かされているとは言えない。生化学的機器測定による数値データは、診査者の技量に頼らない結果であるため、より説得力の高い健康教育の教材としての利用が可能である。本事業で確立した健診システムを、魅力ある歯科保健教育コンテンツとして、さらに受診者の満足度が向上するように改善し、パイロット事業対象校のみならず、より多くの学校歯科健診現場への普及を図ることが今後の課題である。